

## 大統領家族日本公使館へ避難す

一九一三年（大正二年）

二月九日 晴 日曜日。

四五日前から、また革命が起ると云ふやうな風説がポツポツ傳はつた。併しずつと前から既に幾度もかう云ふ噂はあつたので、誰も氣にするものはなかつた。

然るに朝の七時頃、不慮からの知友で、墨西哥に廣大な米田を持つてキング・オブ・ライスと呼ばれてゐる伊太利人ダンテ・クッシ氏が、自動車を飛ばして公使館へ来て、今、市の中央に革命が起つてゐる！ と告げた。自分達が革命勃發の報道を初めて耳にしたのは、實にこの伊太利人からであつた。

そこへ埃太利公使館の館僕が来て、公使からのお使ですと言つて、市内に戦争が起つた由を告げてあわただしく走つて行つた。僕は大意で朝飯を済ませ直ぐ馬車を命じて妻を同伴してチャプルテペックの大統領官邸へマデロ夫人を慰め旁々訪問した。その時大統領夫人の話によれば、今朝未明マデロ大統領は官邸傍の士官學校の學生五十餘名と、少數の兵隊とを率ゐて、白馬に跨り市中に向ひ、市の中央にある「國民劇場」を假本據と定め、昨夜以來「國民政廳」

を占領して此處を足溜りにしてゐる叛軍を攻撃し、遂に叛軍を追ひ散らして、自動車で國民政廳に入つたと云ふことであつた。この日勃發した叛徒等の計畫は、兼ねて政治犯人として收容中なるフェリックス・ディアス氏（大統領プロフィリオ・ディアス氏の甥）と前陸軍大臣レイエス氏を獄中から奪ひ出して、これを首領に戴かうと企てたもので、モンドラゴン將軍がその參謀となつてゐるといふことである。尙又叛徒等は豫ての手に配に基き、昨夜時を同じうしてタクバヤの砲兵聯隊を蜂起せしめ他方トラルパンの下士官學校長も叛徒と氣脈を通じ、その學生を率ゐて國民政廳を襲ひこれを占領したのであるといふ事であつた。

一時國民政廳を退散した叛軍は、午後二時に至り市内にある砲兵本廠を乗り取つて、これを本據として官軍に對戦するに至つた。同廠はそれまでは勿論官軍に屬してゐたのだが、ある士官が反軍に内通して内外から呼應したものだと言ふ。

砲撃の響が轟々と鳴り渡つて、市民は悉く家に隠れて街上人影を見ない。時々飛ぶやうにして自動車が走つて行くのみである。

この日午後二時頃大統領マデロ夫人、大統領の兩親、大統領令妹二人、即ちメルセデス夫人とアンデニリナ夫人等が、銘々の子供や僕婢と一緒に、六臺の自動車で、我公使館へ逃げ込んで来て、「助けて下さい」と頼まれた。余は即坐に承諾して、直ぐにみんなをサロンへ案内した。總勢二十餘名なので、比較的廣い公使館もこれ等の人達の置場に一寸まごついた程であ

る。自分は是等の人等に、日本公使館に逃げ込んだ以上は安心なさい、及ばずながらあなた達の生命は引受けますよ、と云つて慰めてやつた。自分達夫婦を初め、大學、岩子、瑞典のベッドを大統領家族の人達に提供したので、自分達は今晚から長椅子の上や日本流に床の上に蒲團をしいて寝ることにした。

大統領家族が日本公使館へ逃げ込んだことが間もなく墨西哥市在留の日本人に知れ渡るや、彼等は我も我もと公使館へやつて来て、避難の墨西哥人達を慰問し且つその護衛を擔當した。この日本人達は文字通り彈丸雨飛の中を至極大膽に、或は自動車を驅り或は徒歩で情報探知に出かけたり、或はマデロ家族の人達の用達の爲に奔走した。是等の日本人達の中には、夜は馬車の中や自動車の中や、或は玉染臺の上に寝て僅かに眠りを取つた人達もあつた。この日、國民政廳前の戦闘で死傷者三四百人を出したと云ふ事である。(大統領家族が他の外國の公使館へは行かず、何故日本公使館目がけて逃げ込んで来たかの理由は二六六頁以下に詳なり。筆者追記)

二月十日 晴

朝起きて見ると何事もなかつた。九時頃ドクトル鈴木衷と一緒に自分は町に出て叛軍の本據なる砲兵本廠の附近を巡視した。砲五六門がその前後に配置してあつた。他には別に變りがない。

多勢のマデロ家族のもとへ情報を齎して来るもの、見舞に来るものなどで公使館は終日火事場のやうな雑沓だ。そして是等の人達は官軍に都合のよいやうな情報だけを傳へて行く。

叛軍の不規律、叛將間の軋轢、彈丸食糧の缺乏。これらの情報によると叛軍は今後二日とは持ちこたへる事は不可能と云ふ事であつた。それを聞いてマデロの家族は勿論、自分達までが狂喜して思はず萬歳を叫んだ。早速三鞭酒を抜いて祝杯を上げる。まるで凱旋祝ひのやうだ。

國民政廳に陣取つてゐるマデロ大統領は時々電話で、兩親や夫人の安否を訊ね、旁々官軍の士氣の盛んなことや、その鎮壓の手段などを報じて来る。墨西哥獨立百年祭に日本が内田大使を特使として派遣したるに對し、その答禮大使として日本へ行く筈になつてゐたマデロ大統領の弟グスタヴォ・マデロ氏が時々公使館へ来ては、兩親や姉妹達に元氣をつけて行く。氏は長兄のマデロ大統領が小男なのに反して、雲突くやうな大男で、それが太いくつある良い聲で、何か云つては二言目にはきつと、*Allons donc ! allons donc !* 「何の馬鹿馬鹿し！」と云ふ面白い癖のある人だ。二三ヶ月後には日本へ行つた時、到る處でこの *Allons donc !* を遠慮なく振り撒くのだらうと思つて、一層興味深く氏をながめた。

二月十一日 晴

この日午前十時から午後六時まで八時間に亘つて猛烈な市街戦が行はれた。傳ふるところによれば、死者は双方合せて三百、負傷五百と云ふことだ。革命軍は砲兵本廠を本據としてゐる

ので、官軍は三方からこれを圍んで攻め立てた。夜になると市民に對する遠慮からであらう、官軍叛軍共に砲撃を休止した。市中は街燈が一つ残らず消えて眞の闇だ。無論通る人なんか一人だつてない。時々近くで小銃の音がする。

### 命がけの食糧品搬入と電信の發送

二月十二日

砲聲に夢を破られて目を覚ます。七時だ。轟々と天地を震動させて雙方から盛んに撃ち合つてゐる。砲門の数もどうやら昨日よりは多いらしい。愈々今日が最後の決戦の日かと思ひながら跳ね起きる。いい天氣だ。そろそろ、昨日邊りから公使館の食糧が缺乏して來た。何しろ二十餘人の御客なので食糧は目に見えてメキメキ減る一方だ。肉も魚も野菜類も、みんな彈丸雨飛の中をくぐつて、決死の日本人達が隣りの町タクバヤ迄、自動車走らせて命がけで買出しに行つて來るのが、食べる人数が多いので、その食糧も瞬く内になくなつてしまふ。行きも歸りも運轉手が車の上に首を出してゐるだけで、他は悉く車内に腹匍ひになつてゐるのだ。さもないと流弾に當るか狙撃されるか分らぬからだ。自動車が歸つて來る度毎に車體を檢査して見ると、いつも二ヶ所や三ヶ所彈痕を認めるのである。今度の革命が起つてから公使館へ詰め

かけてゐる日本人達は、この危険を冒して我勝ちに買出しに行くことを申出るのである。「今度私番です」「いや君は昨日行つたではないか」「今日は僕が行くんだ」と。この決死の食糧品買出しの志願者達には自分はさすがに日本人は偉いものだと言ふやうに感激した。

併しこれよりもつと危険なのは、電報を出しに行く事だ。電信局は市の中心にある。ここばかりはどうしても自動車では行けない。何故なら、この邊では自動車を走らせば、敵も味方も一齊に機關銃の筒先を向けてバラバラとやつてしまふからだ。エンジンも運轉手も下手やつたら忽ち蜂の巣のやうに穴だらけにされてしまふ事は必定だ。併し戦況を報告する電報は毎日勤くとも一度は日本へ出さなければならぬ。この危険な任務には在留日本人の中でも主だつた人が當つた。高木舜三氏だの、小野寺壽雄氏だの、照井亮次郎氏だの、ドクトル鈴木衷氏だのが順々にこの戦線踏破の危い綱渡りをやつた。一里もある所を歩いて行つて來るのだから、その苦心は一通りではなかつた。しかも一里の内の半分以上は交戦區域なのだ。時々街の壁に蜥蜴のやうに身をくつつけたり、家の門口に隠れて彈丸をやり過したり、二三時間もかかつて漸く歸つて來るのである。ある時などは午後一時頃出て行つた照井氏が、夜になつても歸つて來ないので、さてはやられたな！ とばかりに大騒ぎをした事があつたが、幸ひに照井氏は無事に歸つて來て一同胸をなでおろした事であつた。その時照井氏は町へ出た序に方々を見て回つて來たと云ふのだ。これには心配した人達もその大膽さに少し呆れ返つたが、なんでも照

井氏の見たとところによると、町の中心に近づくに従つて、死體がその邊にごろごろしてゐると云ふことだつた。この話を聞くと、今度は他の連中が行つて見たくて堪らないと見えて、頻りに自分を促して、「外務省へ出す電報はありませんか？」と云ふのだ。

他國の公使館でも、各自その本國へ電報を出したいのだが、誰もそれを持つて電信局へ行くものがないので、大いに困つてゐた。ところが外交官仲間には、日本公使館からは、毎日必ず少くとも一回は電信局へ使ひのものが行くと云ふ噂が立つた。すると各國公使達は好機逸す可からずとなして、手に手に數日溜つてゐた電信を持つて日本公使館へやつて来て、「お序にどうぞ宜しく御願ひいたします」と言ふので、今や我公使館は電報取扱兼業と云ふ有様。併し其後愈々戦争が激しくなつて、電信局通ひは益々その危険の度を加へるばかりになつた。そして今では一里の道の往復が全く命がけの仕事となつて来た。それにも拘らず日本公使館からは毎日缺かさずに一回若くは二回電報を出した。すると各國公使らも頼んだ電報が各自の本國へ發送されるので彼等は、日本公使館を非常に徳として、本當に助かつたと感謝し、同時に日本人達は國家の爲と云へば死を冒すことなんか何とも思はぬ勇氣を頻りに稱揚してゐた。

砲聲が暮れ方までつづく。流弾が三つ四つ初めて公使館へ飛び込んで来た。一つは窓硝子を破り寢室へ落ちたが、幸ひ、人に害はなかつた。大統領夫人は昨夜官邸へ歸られた。大統領からの命令によつてである。夫人が外國公使館へ避難してゐるやうでは、如何にも味方が閉ざり

で、外聞が悪いとも思つたからであらう。併し大統領兩親と三命妹、その他の人達は依然として尚日本公使館に残つて居た。明日は大激戦があるだらうと云ふ風説が頻りに飛ぶ。

二月十三日 晴

今朝も七時から例によつて砲聲開始、午後四時までつづく。

二月十五日 晴

今朝は一時間早く六時から砲聲開始。轟々股々天地を動かすこと前日と同じ。機關銃は節分の豆撒きの如く大砲は轟然として雷の如し。眞に壯絶快絶、戦争は實に人間の爲し得る雄大莊嚴の極致だと思はぬ譯には行かぬ。午後二時晝餐最中に火事の半鐘が聞えて来た。近いらしい。一同公使館の屋上へのぼつて見る。すると僅か三四町先きで大統領マデロの父君の家が黒煙濛濛と焼けてゐる最中である——自分達の間に立ち交つてこの悪魔のやうな火焰を見つめて居た親子四人のマデロ家一族の人達は、暫く無言で、只だ茫然自失してゐた。實に見る目も氣の毒だつた。叛軍が手先の者に放火させたことは明瞭である。稍々あつて我に返つた老夫婦と二令嬢は、目の前に大切な家財の燃えてゐるのを見やりながら、最早覺悟を決めたものか、元の落著いた態度で、みんなと話し合つて居たのが、却つて傍の人達の感慨を強めた。

この夜外務大臣ラスクリン氏から、極祕で御相談申したいことがあるから来て頂けぬかと電話がかかる。曰く、實はこちらから御尋ねする筈なのだが、公使館は人の出入が多いので密

談などは逆も出来ないし、特に私（外務大臣）が夜分公使館へ出入したことなどは成るべく人に知られたくないから、何卒来て頂きたいといふのであつた。そこで自分は道路を隔てて直ぐ隣り合せの外務大臣の私宅へ行つて、大臣にあつて話を聞いて見ると、今日米國大使ウィルソン氏から米國水兵の上陸の許可を要求して來た。その理由は、戦亂がかう長くつづいては、メキシコに居る米國市民の生命財産が氣遣はれるから、それを護衛するためにヴェラクルーズにゐる米國軍艦の水兵を上陸させたいといふ要求なのである。處がそれを許可すれば、この人氣の激昂して居る時だから米國水兵と墨西哥人との衝突は免れ得ない。實に困つたと云ふのである。そこで自分は一策を授けてやつた。すると外務大臣は非常に喜んで安心し、幾度も幾度も有り難うを繰り返した。又その時外務大臣の話によると、官軍も叛軍も兵士には案外死傷が少く高々十數名に過ぎぬ。砲聲は股々轟々たるも實はその實效の少ないのに苦しんでゐる。明日も亦果して決戦があるかどうか分つたものではないと云ふのである。して見ると官軍も叛軍も暢氣な戦争をやつてゐるらしいのだ。かうなると迷惑なのは市民ばかりだ。商店も銀行も今日でもう一週間も門を閉ざしてゐる。僅かに食料店だけが毎朝七時頃にホンの二三分間戸を少しく開くことであるが、一時に多勢の買手が押し寄せ、そのどさくさ紛れに掠奪が行はれるので段々店を開けるものが無くなつた。市民の饑餓は愈々迫るばかりだ。

配達されるものは何一つないので。この頃では電報でさへ配達がピタリと停つてしまつた。

電信局までこちらから出掛けて行かなければ受取れぬ状態である。しかも局へ行くには命がけなのだ。電車はもう完全に停つてしまつた。

砲聲は終日轟いてゐる。風聞によると前後を推算して五千の死傷者を出したと云ふ事だ。最も奇妙なことはそれ等五千の死傷者の中の九割までが非戦闘員だと云ふことである。彼等の大部分は物好きにも、面白半分に飛び廻つてゐる内に殺された彌次馬が多いと言ふことだ。

所によつては砲撃のためにまるで滅茶滅茶に破壊された町もある。其處へ行つて見るとすべて荒され、焼かれ、毀されて慘憺たる光景を呈してゐる。マデロ黨と目されてゐるクララ・シエレル夫人の家の如きは、砲兵本廠から打ち出す砲丸に狙ひ撃ちられて、大理石の美しい建物が無残に傷けられてゐる。クララ夫人の娘カルメン嬢の話によると、家と庭の中で五十餘個の砲弾を拾つたと云ふことである。

そこら中の路傍に半焼けの死體がごろごろ横はつてゐる。バルブエナの原では毎日朝から晩まで死體を集めて焼き捨ててゐる。憲兵、官兵さては彌次馬、女、子供達の死體が積み重ねられて石油の火で無慘に焼かれてゐるのだ。炎が立つ、肉が焦げる、ここにも亦彌次馬が集まつて來て黒焦の死體を長い棒の先きでついて見てゐる。黒いむせぶやうな煙が青々と澄み渡つた空へゆらゆらのぼつて行く。

今朝も六時から例によつて砲聲轟々として夢を撼かす。日本公使館を爆破するなど云ふ風説を聴かされた大統領の兩親は恐ろしくなつたものと見えて、チャプルテベックの大統領官邸に移らうなどと云はれる。自分は今はその時機にあらずと云つて止める。午後になつて日本商店の店員三名が来て、市中にマデロ家族を庇護する日本公使館を今夜焼打ちすると云ふ風説がある。傳へて行く。自分はこれを秘して家族のものへも聞かせずに置く。眞偽も判然しないのに老人夫婦や婦女子達に恐怖を起させてはならぬからだ。その後夕方の六時頃になつてマデロ兩親の自動車の運轉手が来て、今夜叛軍はマデロ家族を襲撃すると云ふ評判だと言ふことをマデロ兩親に告げる。この人達の間に不安と恐怖が起る。彼等は止まつて公使館に迷惑のかかるのも欲せず、といつて公使館を立退くことの不安をも欲せぬものやうである。

晩餐の後彼等は愈々チャプルテベックの大統領官邸へ移ることに決した。自分は色々この決心を醸へさせようと努めたが、どうしてもきかないので、それならば自分は妻子を悉くこれに同伴させて行かせる事にした。それは公使館員は逮捕したり攻撃したりする事が出来ないから、これによつて少くとも大統領の家族を掩護し、幾分なりとも彼等を安心させん爲の微意であつた。二十餘名が三臺の自動車に分乗して、公使館から暗い夜の中へ滑り出したのは丁度十時だつた。彼等は自動車の中で皆重なり合つて、腹笥ひの恰好で息を殺してゐたのだ。時々耳近く銃聲が聞えて弾丸がヒューヒューと風を切つて飛んで行くのが、ハッキリ分つたと云ふの

だから、彼等はどんなに恐ろしく身の毛を竊立てたことだらう。街燈の消えた人通りのない街を三臺の自動車は燈火を掻き消して、矢のやうに、追つかげられるやうにして、チャプルテベックへ急いだ。小野寺壽雄、照井亮次郎兩君が護衛のため附添同乗。大統領官邸はメキシコ市を一目に見下す、高い丘の上に、森をめぐらして立つてゐる。叛軍の砲撃を恐れて一切燈火を消して眞暗なので、その勝手のわからぬ官邸は、妻や大學等にとつては、まさしく一個の迷宮としか思はれなかつたと云ふことであつた。自分は官邸へ電話をかけて向うの様子を訊いたり、こつちの様子を知らせた。果然焼き打ちなどは遂に實現されなかつた。單なる流言に過ぎなかつたのである。併しこの夜は公使館でも自分を初め二十餘名の日本人は、各自ピストル、銃、日本刀をしつかと手に持つて夜通し警戒した。されど何事もなく夜が明け放たれると、緊張してゐただけに一同は聊か氣抜けして、皆その後はグッスリ寝込んでしまつた。

二月十六日 晴

ニニースを得るために、外務大臣をその私邸に訪問す。曰く今日或時間を限り、官軍叛軍間に休戦の約束成れりと。米國大使ウキルソン氏が大統領マデロに辭職を勸告したるも峻拒せられたと言ふ噂が立つ。十一時頃自動車でマデロ兩親の家の焼跡を見る。午後四時チャプルテベック大統領官邸へマデロ夫人並にその兩親を訪問す。妻は其の後衣類を持ち行く爲一寸公使館へ歸り、直ぐに又チャプルテベック官邸へ歸る。

二月十七日 快晴

昨夜は夜半頃にも二三砲聲が聞えたが今朝も亦六時頃から盛んにやつてゐる。いつもより又一層激しいやうだ。併し今ではもう耳に慣れて平氣で聞いてゐられるのだ。

二月十八日

午前中砲撃があつたが、何時になく力抜けがしてゐた。變だな、と思つてゐたら、やがてそれも歇んでしまつた。午後二時頃自分はチャプルテペック官邸へ電話をかけ、今度は大統領官邸を砲撃すると云ふ評判があるから、早く公使館へ戻つて来たがよいと云つてやつた。すると妻子共は大統領家族と一緒に歸つて来た。聞けばこれ迄マデロ大統領の信任を一身に集めてゐた、ウエルタ將軍が寢返りを打つて、昨夜急に叛軍に通じて、國民政廳にゐた大統領初め、閣員一同を捕虜とし、政廳内の一室に監禁したと云ふことであつた。

この急に寢返りを打つたウエルタ將軍を自分が初めて見たのは二月一日の事であつた。

彼はその數日前、北方の反亂を平定して凱旋したのであつた。彼とその軍隊との入市式は市民を狂喜させたものだ。二月一日にはマデロ大統領はこの凱旋將軍のウエルタの名譽の爲に、チャプルテペック官邸に於て盛大なレセプションを催し、上流人士や外交官一同を招いた。その時大統領はウエルタの手を取つて來賓の中を廻りながら、「これが私の英雄です。」と云つて來賓一同に紹介した。ウエルタは、苦蟲を噛み潰したやうな、一癖も二癖もありさうな男で

いつも黒眼鏡をかけて居る。自分は又彼が氣味の悪い手をしてゐるのを見逃さなかつた。この「英雄」がその日からまだ二十日もたたぬ内に、大統領マデロを裏切つて、一室に監禁してしまつたのだ。

二月十九日

大統領の家族の人達の悲嘆を慰藉するのに忙しい。大統領はウエルタから辭職を迫られたが「殺されても斷じて辭職しない」と頑張つたと云ふ事だ。大統領の氣質をよく知つてゐる家族の人達はさもあるべしと云つてゐた。又その爲に大統領の生命に關する不安が一層深くなつて來た。

マデロが辭職を迫られても頑として應じないので、これを脅迫するため今夜公使館を砲撃して、大統領家族を擧殺しにすると云ふ評判が立つた。日本居留民から三人程同じことをわざわざ注進にやつて來たが、その中の一人の如き前にもかう云ふ評判は度々あつたが、今度はウエルタのやうな向う見すの男の事だから、何をやるか分つたものでないと警告してゐた。そこで自分は直接反將ウエルタと面談しようと思つて、直ぐに自動車を用意させ、荒井通譯官を右の方に、ドクトル鈴木衷君を左手に、自分は中央へ乗込んで大統領政廳へ向つて走らせた。鈴木ドクトルは萬一の應急手當のため、繻帶や藥品の入つた小型の鞆を持つて行つた。自動車には日章旗を翻し、若し運轉手がやられた時は直ぐ交替が出来るやうに、補缺の爲もう一人運轉手

を同乗させ、彈丸雨飛の中を突つ切つて行つた。途中幾度かヒューヒューと唸りを立てて彈丸が頭上を掠めて行くので、大統領政廳に著いた時には眞に危機を脱した思ひがした。

名刺を出してウエルタに面會を求めた。彼は直ぐと自ら出て来て、余を應接間へ案内した。そこで自分はフランス語で「風聞によれば、貴下の命令に依つて今晚マデロ大統領の兩親、及びその家族達の避難してゐる日本公使館を焼打ちすると云ふ事だが、それは實際の事であるかどうか、率直に云つて欲しい」と切り出した。するとウエルタは言下に、そんな風説は全然虚報であるから安心して頂きたいと答へた。そして彼は言葉を續けて、閣下の御安心を得る爲、部下の兵隊をして、日本公使館を警護せしめる事に致しませうと云つた。自分はそんなことをすれば公使館から食糧の買出しに出る者や、電信を出しに行くものや、大統領の家族を慰問に来る多くの人達が、一々誰何されたりなどして、却て迷惑でもあり不便でもあるから、公使館を警護する代りに、公使館所在の地區一帯即ちカルチエ・ロマ區を遠巻きに警護して貰ひたいと申し出た。ウエルタは直ぐ様承知して、では直ぐその方面の部署を司つてゐるものに、電話を以つてその趣、命令致しますと云つて、直ぐに副官を呼び入れて、電話でその命令を傳へさせた。そこで自分はウエルタに向つて話を續けて、「元々自分が日本公使館にマデロの家族を庇護してゐる譯は、日墨兩國間の親善關係並びに、人道上博愛の精神に基いたものである。日本には昔から『窮鳥懐に入る。獵夫もこれを殺さず』と云ふ諺があつて、逃げて来て、救ひた

求むるものには、一視同仁これを庇護するのが日本の國風である。たとへばマデロ大統領の家族でなくとも、危急の場合に日本公使館へ逃げて来た墨西哥人なら、誰彼の差別なく皆庇つてやる。今度のことも要するに墨西哥人に對する日本人の同情の發露である。殊に墨西哥のこの頃のやうに、革命が頻發し、朝にして其の夕の測られざる形勢にあつては、誰か明日、ともすれば、或は貴下の家族が、今日のマデロの家族と同じ運命の道を辿つて、日本公使館へ逃げ込んで来ない事を斷言出来ようや？ その時に於ては勿論自分は同じ方針で、貴下の家族を庇護してやる心組である。自分が墨西哥人を庇護するこの眞意を了解して頂きたい」と意氣込んで話した處が、淡泊な武將だけあつてウエルタは、今回マデロ家族に對し手厚い擁護を與へられた事は、日本公使に對して深く感謝する所であると述べ、彼は重ねて、公使館は飽迄尊敬して警衛するから安心して下さいと云つた。彼はフランス語は餘りよく分らなかつたやうだから、自分が喋つた後で念の爲、更に荒井通譯官をして明快な西班牙語で通譯せしめた。ウエルタは心から感謝してゐるやうに見えた。

自分はそこで、大統領マデロ氏がこの政廳内に監禁されてゐると云ふ事だが、どうか面會させて貰へまいかと云ふと、ウエルタは余が餘り出し抜けに云つたためか、考へる暇もなく、直ぐ承諾し、そして副官に命じて自分をマデロの監禁室に案内させた。

監禁室と云つても監獄でもなんないので、マデロは政廳内の立派な部屋にゐたのである。



自分がその部屋に入るを見るや否や、マデロは驚きと嬉しさとの表情を満面に浮べて、余に向つて飛ぶが如く早足に驅けて来て、いきなり強く抱擁し「よくマア訪ねて来て下されました」とその感謝と感激とを披瀝し、次いで老父母や、妻君や、兄弟姉妹達の安否を尋ねるので、自分には皆無事である旨を傳へると、彼は余の手を堅く握つて、全く閣下のおかげですと態度も繰りかへして感謝をのべた。暫くしてそこを出た。自分達三人はこの外出した序でを以て、砲兵工廠へ行つて叛軍の参謀なるディアス將軍と、モンドラ・ドラゴン將軍を訪ねた。併し不在とのことなので、留守居の中佐某に面會し、日本公使館が墨西哥人の避難民を庇護して居るのは、日本と墨西哥との友情に基くものである旨、先刻ウエルタに説明したと、同じ意味のことを説明し、ディアス將軍が歸られたら、この旨よろしく傳言を頼むといひ残して公使館へ歸つて來た。

公使館へ歸つて見ると、大統領の弟で、近々日本へ出發する事になつてゐた答禮特派大使の、グスタヴォ・マデロが昨夜二時砲兵工廠内に於て銃殺されたといふ悲報が傳はつてゐたので、その両親の老夫婦を初め、家族の人達が一望に相擁して人目を避けて泣き崩れてゐる様は氣の毒の極みであつた。

この夜九時、大統領は汽車でヴェラクルズへ送られ、そこから國外追放になるのだと云ふニュースが公使館へ入つた。さうなれば命だけは助かると云ふので、マデロの家族一同悲しみの内にもやや愁眉を開いて、兎に角停車場へ行つて待ち合せる事にした。併し十二時になつても一時になつても、大統領の姿は遂に停車場に見えなかつた。午前二時頃になつて急に出發見合せと云ふ通知があつたので、一同は又不安の内に公使館へ戻つて來た。風説によれば此の日反將ウエルタはマデロ大統領に辭職を迫つて止まず、大統領も亦今や全く敵の手中に陥つて如何とも爲し難きを悟り、安全に國外に出ると言ふ事を條件として、遂に辭表に署名することを約したと云ふ事であつた。併し辭表は一時外務大臣ラスクライン氏の手には保管して置いて、マデロ大統領が安全に國外へ出たのを見届けた上で、初めてウエルタに手交される取極めであつた。然るにウエルタはその約束の履行を待たず、直ちにマデロの辭職を發表して、自ら假大統領たることを公布した。

二月二十日 快晴

この日外交團はウエルタ假大統領を國民政廳に訪うて、マデロ大統領と副大統領の生命に危害を加へないことを切望する旨を開陳した。ウエルタは誓つて前大統領マデロ及副大統領の生命の安全を保證することを聲明した。この夜七時マデロの夫人を除くの外、その他の人達は皆な公使館を引揚げてシリオン夫人の家へ移つた。ウエルタが假大統領となり、革命騒亂も熄んだので、最早身邊の危害は去つたものと思つたからである。マデロ夫人だけは尙ほ暫く公使館に残ることになつた。チャプルテペックの宮殿へは既にウエルタが入つたから。

## 假大統領の日本感謝の演説

二月廿一日 快晴

假大統領ウエルタは國民政廳に於て、外交團を公式に接見した。自分は田邊書記官武富外交官補を同伴して行く。昨夜外交團が米國大使館に會合して起草した今日の演説草案を、外交官筆頭たる米國大使が朗讀した。その朗讀が済むと、米國大使を初め各外交官は順次假大統領とほんの禮儀一べんの握手を交した。ところが余の番になると、ウエルタは両手で余が手を堅く握りながら突然演説を始めた。この型破りの仕草には外交官一同が驚かされた。ウエルタは演説句調で述べて言ふのである。「日本人の武勇にして愛國心の強いことと、その義侠心と思ひやりの深いことは兼ねて聞いてゐた所でありましたが、此の度日本公使の行動によりて、私はそれ等を目の前に見せられたやうな感じが致しました。あの騒動で人心動搖の際に當り、マデロの家族の人達即ち墨西哥人二十餘人の生命が助かつたのは、全く日本公使が四圍の危険を事ともせず、勇敢に庇護して下されし御蔭であります。それに就きまして私は今墨西哥大統領としてのみならず、一般墨西哥人の名に於て無上の感謝と深厚なる敬意を、茲に日本公使に對して表明するものであります。そしてメキシコ人は日本公使のこの恩は、永久に忘れないうであり

ませう」云々と陳べ終つて、重ねて僕の手を固く握つて感謝の意を表した。その態度には外交官一同昂然として居た。

すると英國公使が立つて「私は僭越ではありますが、日本との同盟國でありますから、ここに一言我同盟國の代表者の今度取られた勇敢にして、且つ慈仁なる處置に無限の讃辭を呈します。それと同時に、我々外交團の一員に日本公使の如き義侠の人を持つと云ふ事は、我々外交團の名譽であることを一言加へて置きたいのであります」と演説した。外交官の接見式が済んで、政廳内の控室で、例に依つて三鞭酒が出たのであつたが、その間他の外交官達も皆頻りに余に向つて讃辭を呈した。

接見が終つて政廳外に出ると、その兩側に並んでゐた群集は、僕達の自動車を見るや頻りに「日本萬歳」「日本萬歳」と連呼した。

夕刻、前外務大臣ラスクライン氏は公使館へ來て、新舊外相の名を以つて余に對して、この度マデロ家族庇護に就き、公式に感謝の意を述べた。各國公使の夫人や多勢の社交界の人達が美しい花束を持つて來て、妻がこの二週間の間の勞苦を慰めたり感謝したりしてゐた。

今次日本公使館の取つた態度は、意外に墨西哥人並びに外國人に好印象を與へたのみならず、メキシコ市のあらゆる新聞紙は擧つて「日本人に固有なる高き道德の發露」などと、大々的の見出しを掲げて賞揚した。この素晴らしい評判に日本人居留民は皆大喜びで、公使館へやつ

て来て「よくやつて下さいました」と心からの禮を述べ、中には「これから我々は、墨西哥人や外國人に對して鼻が高いぞ」などと云つて喜ぶものもあつた。

妻は二月九日の争亂以來、大統領の家族二十餘人の人達を賄はなければならなかつたので、朝から晩まで臺所と應接間との來往で非常に忙がしかつたのと種々な心遣ひの爲ゲツソリ瘦せてしまつたと云つてゐた。

マデロと副大統領は依然として國民政廳内に監禁されてゐる。併しその他の内閣員は悉く釋放された。この日マデロ母堂は新政府の許可を得て前大統領に面會した。午後マデロ夫人も亦その夫に面會の爲に國民政府へ出かけたが、政府は夫人に面會の許可を拒否したために、空しく歸つて來られた。

どうやら形勢は稍々平穩のやうだ。今回の戦亂を通じて、日本居留民の被害は至つて少く、一人の死者は勿論負傷者さへもなかつたのは仕合せであつた。

二月二十二日 快晴

今日はワシントンの誕生日だと云ふので、米國大使ウエルソン夫人がレセプションを開いた。新内閣員が揃つて出席したのが目立つた。併し外交官の中には、いくらワシントンの誕生日だからと云つて、レセプションを開いて三鞭酒を飲むのなどは此の際穩當ではない、第一墨西哥の前政府に對して、あてつけがましい仕事だ、と云つてゐる人が少くなかつた。蓋し米國大使

は豫てより叛將ウエルタとの默契に基き之を援助して居るのだと言ふ風説などもあつたからだ。

二月二十三日 快晴

朝七時マデロ夫人の親密な友達の女の人が大急ぎで走つて来て、マデロ大統領は前副大統領と共に、昨夜十一時頃國民政廳から新監獄に移される途中、遂に殺害された旨を告げた。この凶報を聞いたマデロ夫人の驚愕と悲歎とはとても筆紙の盡すところに非ず。夫人の悲歎を見るに忍びず余は直に西班牙公使コロガン氏と共に、新内務大臣宅を訪ひマデロ氏遺骸の引取り方を交渉した。併し内相は、これは陸軍大臣の所管なので自分一個の獨斷では如何とも致し難いと云ふ。で僕は直ぐに陸軍省に行つてモンドラゴン氏を訪ねた。不在。そこで、又西班牙公使と一緒に更に監獄へ行く。併し監獄では陸軍大臣の命令がなければ何とも取計らひ兼ねると云ふ。據なく僕は獨逸公使、英國公使と共に外務大臣ドラバラ氏を訪問す。そして外相の明日のレセプションを延期すべきこと、及び前大統領に對しては、それ相應の禮式を以て葬るべき事を勸告した。

余は更に英國公使と共同して米國大使館に出掛けて、先刻ドラバラ氏に告げたと同じ内容の事を米大使に話した。そしてこれら二三公使等と相談の結果、遺骸は午後二時親族に引渡すことに決定した。余はモンドラゴン氏の承諾を得てマデロの屍體を一見した。二發の彈痕あり。その二發ともに後から打ち抜いたものであつた。一つは後頸部（ほんのくぼ）から入つて前頭

に抜け、他の一つは後頸から（こめかみ）へ貫いて居た。無惨な殺し方見るに忍びず。公使館へ歸ると新聞記者が雲集してゐた。この日マデロ夫人は日本公使館から、シリオン夫人方へ引移られた。

二月二十四日 晴

前大統領マデロ氏の葬儀行はる。余は公使館員一同並に家族残らず引連れて會葬した。日本居留民の主だつたもの亦皆會葬す。

式は午前十一時に始まつて、午後一時に終つた。儀式は極めて質素簡單を極めた。

この日舊内閣員の捕はれたニュースや逃亡した報道が頻々傳はる。夕刻妻同伴シリオン夫人方に行き、マデロ未亡人に懇ろに弔辭を述べる。

二月二十五日 晴

朝シリオン夫人方にマデロ未亡人を慰問。

二月廿六日 快晴

午後妻子と共に花束を携へマデロの墓を弔ふ。佛蘭西墓地に靜かに眠るマデロの靈を慰めんとして、労働者の群を爲して墓参に行くもの多し。花環の一つに「デモクラシーの犠牲」と書いたのが目についた。令弟グスタヴオの墓と相隣りして並んでゐる。あの元氣のいい、陽氣な男が、この下に物云はぬ人となつてゐるのかと思ふと、數奇なる此の見物の運命に一入涙を覺えた。（以上日記終り）

右のメキシコ革命當時の情況は、今日でもまだ日本にはよく知られて居ないやうであるから、今、この機會に於て、その當時の事情を（曩きに在メキシコ公使館へ送附した一文よりも更に詳しく説明して廣く日本人に知らしむることはまんざら興味がないでもないから、前掲日記二月九日の末段に追記して置いた「革命勃發の際、何故にマデロ大統領の家族達が日本公使館へ逃げ込んで來たか」を、まづ初めに説明し、併せて事の此處に到つた理由をも附記することにした。

#### 大統領家族日本公使館へ避難した理由

そこで革命騒動が起つた時何故マデロの家族達が日本公使館へ逃げ込んで來たか、その譯を先づ以てお話する。

云ふ迄もなく墨西哥首府には米國大使館を初めとし、英、佛、獨、伊、その他歐米諸國の公使館が澤山あるのだが、それ等の公使館へは行かずに、何故直ぐ日本公使館を目指して避難して來たかと云ふ理由に就いて一言説明しておかねばならぬ。それは、私の家族と大統領マデロ